

施設紹介

(財)国際医学情報センター

財団法人国際医学情報センターの成り立ち

財団法人国際医学情報センターは、1972年に慶應義塾大学医学情報センター（北里記念医学図書館）を母体として発足した医学分野の専門情報センターで、厚生労働省医政局総務課と文部科学省研究政策局情報課とが主管している。

30年前の発足当時、米国であれば国立医学図書館 NLM (National Library of Medicine) を中心とした RML (Regional Medical Library) のネットワークにより全国的に組織立った医学医療情報サービス提供が図られていたものの、日本にはこの様な機関は存在せず、ネットワーク活動も決して万全ではなかった。慶應大学の医学図書館において、そのサービスを学外にもオープン化し、また、NLM との連携によって MEDLINE (当時は MEDLARS) のデータベースに国内文献を入力する業務も行い、その機能は一私立大学の図書館、といったものではなかった。

そこで財団法人としての独立により、国際医学情報センター (以下「IMIC」 International Medical Information Center) が MEDLARS の様な業務、大学外に対するサービスなどを継承し、慶應義塾大学医学情報センターでは本来の学内サービスに徹することになった。

主要業務

医療機関・製薬企業など学外への図書館情報サービスを行うと同時に、翻訳サービス、医学情報分析、受託調査研究業務などを実施し、MEDLINE の他にも APTIC (Air Pollution Technical Information Center)、INIS (International Nuclear Information System)、Cancerlit といった国際的なデータベースの作成協力も続けてきた。

製薬企業各社の社内データベース構築や、医薬品に関する申請書資料の作成協力、医薬品副作用文献の速報サービスやその成果としての SELIMIC (Side Effect Literature in IMIC) 医薬品副作用文献データベース提供も行っている。Web ベースの IMICOrder から文献検索・文献複写・翻訳サービスの申し込みを受け付けており、IMICWeb からは米国 NCI のがん情報、CDC の感染症情報 (M MWR の抄訳) や内外の学会情報な

ども提供している。

最近の取り組み

3年前からは EBM 支援センターを設置し、EBM 関連業務にも力を入れている。具体的には、各種診療ガイドライン作成支援や、EBM 関連情報の収集提供、EBM 関連研究班などとの協力活動で、深く関わってきた診療ガイドラインには、脳梗塞・くも膜下出血・白内障・乳がん・肺がん・肝がん・脳出血・腰椎椎間板ヘルニア・大腿骨頸部骨折その他多数の実績がある。また、EBM 関連業務をより積極的に進めるため、昨年からは NPO 法人医学中央雑誌刊行会と事務所を共同化し、密接な連携を保つこととなっている。

また、この他にも学会事務室を設置し、各種医学系の学会の、学会誌刊行や学会事務代行などの業務も行っている。

取材協力：財団法人国際医学情報センター
事業推進室長 鈴木 博道 氏



IMIC のビル外観 (信濃町瓦館の3階・4階)

4月22日	4月23日	4月24日	4月25日	4月26日	4月27日	4月28日
休館日	休館日	休館日	休館日	休館日	休館日	休館日
休館日	休館日	休館日	休館日	休館日	休館日	休館日

●更新情報 04月24日にMMWR速報版を更新しました。
 ●更新情報 04月18日にSELIMIC国内医薬品副作用文献集データベースを更新しました。
 ●更新情報 04月18日にがんInfoを更新しました。

☺ 医学論文の複写、複製代行のお申込み

●IMICOrderのご利用方法 (WebメンバーズのユーザーIDはご利用になれません)

国際医学情報センター HP : <http://www.imic.or.jp>



オフィス風景



文献書庫



翻訳部門



文献複写の様子



翻訳リバイザ



事業推進室長 鈴木博道氏